

看護闘争ニュース

NO. 128

2008年 2月28日

2月12日

「医療現場の危機打開と再建めざす国会議員連盟」結成

超党派で国会内に議員連盟が結成され、会長には、尾辻自民党参議院議員（元厚生労働大臣）が就任しました。

医療現場、とくに医師や看護師の働き方に国会内でも関心が高まっています。

思いっきり、地元国会議員に賛同を呼びかけましょう！

国会議員の賛同	122名
自治体での国への意見書採択	819
新增員署名	33万1165筆

2月13日診療報酬改定

「7対1」看護配置基準に「看護必要度」

政府は、「7対1」入院基本料について、昨年1月の中医協「建議」を受け、取得病院に制限を加える目的で「看護必要度」を検討していました。今回の改定で、「看護必要度」を導入し、基準を満たした場合に「7対1」を許可することになりました。

要件は、「一般病棟の重症度・看護必要度に係る評価表」（ハイケアユニット評価表に修正を加えたもの）で測定し、「患者の状況等に得点（A得点）が2点以上、患者の状況等に係る得点（B得点）が3点以上を満たす患者を1割異以上入院させている場合に算定できる」となりました。

「7対1」は、病棟の種別となっていますので、内科・外科・整形などの一般病棟全体の平均で「1割以上」ということです。

医労連のサンプリング調査では、若干の整形などで1割以下となりましたが、全体の平均にすれば、基準を満たせない施設は、極端に限られ、大きな影響は出ないという結果です。



5月の看護の日・看護週間
すべての県で
ナースウェーブを！

看護師が求める看護業務が変化？

看護管理学会の「看護師業務に関する意識調査のレポート」より

看護管理学会で発表されたある日赤病院のレポートです。参加した国共病組の組合員も、「看護師の看護に対する考え方が変化している。看護の基本から考えれば、これでよいのか」と疑問に感じたといっています。

「看護師が求める看護師業務」は、「観察と記録」が最多だったとして、ベッドサイドケアなどを看護助手や他職種へゆだねていくことを結論付けています。看護業務の最も基本的で重要な部分である「療養の世話」が軽視されていること自体驚きですが、最近の看護師の意識の変化ととらえるなら、要注意です。現在、規制改革会議や厚生省の動きで、医師不足を理由にして、医行為などを看護師やコメディカルに委譲、看護業務を看護助手に委譲する動きが出ているもとの、安易に看護師自らが「看護」を手放してもいいのでしょうか。

【調査の目的】看護師不足や離職要因に業務量の多さがあげられている。業務の満足度も低い。そのため、看護師が求める看護師業務は何かを探るために、A総合病院で152名の看護師を対象に調査を行った。

【結果】

○「看護師が求める看護師業務」は、観察76.7%、記録74.4%、注射・点滴56.6%、指示受け56.6%、与薬50.4%、処置・介助47.3%、患者教育41.7%、退院計画38%、入院受け入れ34.1%だった。その他に、清潔介助7%、おむつ交換・食事介助3.9%、体位変換3.1%、排泄介助2.3%だった。

○「患者のリスクに応じて、看護師だけがケアに介入しなくてよいと思われる業務」は、おむつ交換58.9%、清潔介助58.1%、食事介助55.8%、排泄介助53.5%、体位変換48.8%だった。与薬15.5%、注射・点滴11.6%、患者教育10.9%、退院計画7.8%、入院受け入れ7%、処置・介助3.9%、観察・記録・指示受けは0.8%だった。

○「患者にどのような看護を提供したいか」の自由記載では、@業務をこなすのが精一杯で、患者が不安を訴えても、業務優先になってしまっている、@1人1人の患者・家族とゆっくり関わる時間とゆとりがほしい、@もっと、患者の個別性を考えた看護を提供したい、との主に3つの意見が上げられた。

【考察】「看護師が求める看護師業務」は、観察と記録が最多だった。「看護師だけがしなくてもよい業務」として、おむつ交換などベッドサイドケアが高値を示した。観察や記録は、看護技術の提供だけではない看護資質を高めるための原点であり、看護師が求める業務の最高値を示した。A総合病院は「7対1」を満たしても、看護師は更なる個別性を重視したゆとりある良質な看護を提供したいと希望している。看護助手や他職種へ看護師業務の一部をゆだねることは、患者のニーズにこたえるゆとりが生まれ、予測性を持った看護が展開でき、患者や看護師自身の満足度の向上に繋がっていく。

【結論】看護師が求める業務の高値は、観察と記録である。今後、看護師業務の見直しが必要である。

“燃え尽きる”日本の看護師

東京女子医大看護学部・金井パック雅子教授

金井教授らは、アメリカペンシルバニア大学のリンダ・エイケン教授と共同して看護師の労働環境を調べた。

日本の調査は2005年に大学病院など全国19の病院に勤務する看護師約7100人に聞き、約6000人から回答を得た。

エイケン教授が1998・99年に同じ質問票で実施したアメリカ・カナダ・欧州の調査と比べた。

日本の看護師は、高い燃えつき（バーンアウト）と答えた割合が58%で、米国の43%、ドイツの15%などより高かった。エイケン教授から「燃えつきがこんなに多いなんて、信じられない。データ処理など何かの間違いではないか」と疑問が出たくらいだ。

現在の仕事に満足していない看護師も、日本は60%に達し、欧米より多かった。退職を希望する看護師は4割近くいた。満足できる魅力的な職場づくりが必要といえる。

「看護師と医師の関係が良好」と答えた看護師の割合は、欧米で80%以上だったが、日本は63%。人手不足を示すように、「仕事に十分なスタッフがいる」との回答は、欧米の約30%に対して、日本は19%にとどまった。

薬を間違える誤薬や院内感染の経験は、日本の看護師が欧米より多く、ケアの質が問われそう。患者や家族からの苦情や言葉の暴力は日米ともほぼ同じで、約半数の看護師が「ある」と答えた。

金井教授は「日本の看護師は欧米より厳しい条件で仕事をしている。燃えつき率が高いのは問題で、支援体制など対策が急務だ」と話している。

2008年1月15日京都新聞より